

《書 評》

Garrett G. Fagan, *The Lure of the Arena: Social Psychology and the Crowd at the Roman Games*

Cambridge University Press, Cambridge, 2011, Pp. xii, 362.

佐 野 光 宜

アウグスティヌスの友人でもあり弟子でもあったアリピウスは、北アフリカにいた時分、剣闘士の見世物に熱中していたが、アウグスティヌスの教えによって競技を観に行くことをやめた。しかしその後、法律を学ぶためにローマに移ると、友人たちに無理やり連れられて剣闘士競技を観戦してしまう。以下はそれに続く箇所である。

彼（アリピウス）は血を見るやいなや、残忍さを飲み干した。彼は目をそむけず、それをじっと見つめた。知らぬ間に激しい怒りに身をゆだね、邪悪な競技に満足し、血まみれの快楽におぼれたのだ。もはや彼は闘技場にやってきた時の彼ではなく、彼の周りの群衆の一人となり、彼を闘技場へと連れてきた者たちの、本当の仲間になったのである（August., *Conf.*, VI, 8.）。

ここでアウグスティヌスは、剣闘士競技の持つ残忍さとそれがもたらす不道德な快楽に負けてしまう心の弱さを述べている。その是非は措くとしても、この一節を読めば、それほどまでに人をひきつける剣闘士競技の魅力とはいったい何であったのだろうか、誰も素朴な疑問を抱かざるをえない。著者 Garrett G. Fagan もこの一節を引用し、アリーナで行われる見世物の魅力を明らかにすることを本書の課題に設定する。

ここで著者を簡単に紹介しておこう。Fagan は現在ペンシルバニア州立大学の准教授だが、評者が Fagan を知ったのは *Bathing in Public in the Roman World* (The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1999) の著者としてであった。また、最近出版された M. Peachin(ed.), *The Oxford Handbook of Social Relations in the Roman World* (Oxford University Press, Oxford, 2011) において、“Socializing at the Baths” と題された一章を執筆していることから、学界ではまず公共浴場研究の第一人者という認識がなされていると思われる。Fagan はこれらの著作の中で、公共浴場の時代・地域による差にも注目しながら従来説を批判し、さまざまな階層の人々が日常的に集まる場所であった公共浴場は人々が対等に接する場ではなく、人々の間の身分・社会的立場の差異が双方に再認識される場であったことなどを主張した。公共

浴場への関心は、娯楽全体への関心の一環であったようで、2冊目のモノグラフとなる本書 *The Lure of the Arena: Social Psychology and the Crowd at the Roman Games* において、剣闘士競技を始めとした円形闘技場で行われる見世物を議論の俎上に載せる。以下、章立てを示したのち、内容を紹介していこう。

Introduction: Alypius in the stands

- 1 Seeking explanations
- 2 A catalog of cruelty
- 3 Groups, crowds, and seats
- 4 Crowd dynamics at arena spectacles
- 5 Arenas of prejudice
- 6 Gladiators and sports spectatorship
- 7 The attractions of violent spectacle

Conclusion: the lure of the arena

Appendix: select literary and epigraphic *testimonia* for arena crowd behavior and related issues

まず、Introduction において、本書の目的と分析手法が簡潔に示される。Fagan は「アリーナで行われる見世物の魅力とは何か」という問題に対して、従来の研究が採ってきた象徴的・宗教的・政治的視角、また社会学的・人類学的手法は用いないことを言明する。これらの研究は、特定の文化的・歴史的コンテキストに強く縛られ、また観衆の存在はそこから抜け落ちるか、受動的な存在として描かれるのみである。そこで注目されるべきなのが人間心理であり、社会心理学という分野から得られた知見である。これによって、暴力的な見世物が時代や文化を超えて人々に魅力的なものであったこと、そしてローマ時代の人々にとってこういった見世物がどのような存在であったのかをこれまで以上に深く理解できるとする。続けて、ローマにおける見世物の起源、社会心理学の長所と限界に触れたのち、ローマ時代の見世物については、不足しがちな史料を最大限に活用するため、時代・地域ごとの差異をいったん等閑に付すことを断っている。

第1章「Seeking explanations」では、まず歴史学側の先行研究が整理される。ローマ人の暮らしの一風変わった刺激的な一面程度の認識であったものが、ローマ人による文化的な営為であるとの認識に転換していくのが1970年代以降であり、Faganによれば、その最たるものがK. Hopkinsによる研究であるという¹⁾。Hopkinsによって、ローマ文化のさまざまな特徴を解釈するためのレンズという位置づけを与えられた剣闘士競技・円形闘技場は、1990年代にかけて多様な視角から研究されていく。それらの研究によって指摘されたローマ社会の特徴をまとめ、各研究の意義を評価しながらも、それらのどれひとつとしてアリーナで行

われる見世物という現象や、ローマ人が闘技場に大挙して訪れた理由を十分に説明することはできなかったと指摘する。そこで先ほど述べた、社会心理学の知見を援用して人間心理へ注目する本書の研究意義を主張するが、この研究によって明らかにされる成果が従来の研究成果を否定するものではなく、相互に補完するものであることは繰り返し述べられる。それに続けて、社会心理学の知見がローマ社会にも適用可能であることが説明され、とくに集団や群集の心理、スポーツを観戦する客の心理、偏見という感情、暴力的な娯楽の持つ魅力に関する議論に着目していくことが述べられる。

第2章「A catalog of cruelty」では、見世物の場で示される暴力性に人間がひきつけられるということが、ローマ人に限ったことではないこと、すなわち人間全体に共通して見られる性質であることを、さまざまな時代・地域を見渡して示していく。このことは、社会心理学を古代社会に適用できるのかという疑問とも大きく関わるものである。見世物として行われる処刑や格闘、動物を殺すスポーツが歴史上ほぼ常に行われてきたことが豊富なエピソードで示される。

第3章「Groups, crowds, and seats」では、本書で中心的に援用される社会心理学の理論が紹介される。まず、集団間葛藤の生起過程を説明するために1980年代に提起された社会的アイデンティティ理論 (social identity theory) であるが、この社会的アイデンティティとは、自己が所属する社会集団や社会的カテゴリに基づいた、自己概念の1つである。自己が帰属する集団 (内集団 ingroups) とその外部に存在する集団 (外集団 outgroups) の社会的比較を通じて、内集団を肯定的に評価し、その裏返しとして外集団を否定的に捉えようとするため、内集団へのひいきや外集団への差別といった現象が発生することが実験を通じて裏付けられてきた。次に群集 (crowds) が取り上げられる。群集という存在は、19世紀以降長らく主張されたような、あるいは一般にイメージされやすいような、無秩序で衝動的に行動する集団ではなく、非常に秩序だった集団で明確な行動目標も持つ存在であることが、フリーガン研究などを参照しながら説明される。この知見をもとに、紀元59年、剣闘士競技の最中にポンペイ・ヌケリア両市民の間で起きた有名な殺し合いの騒動が分析される。剣闘士競技が、ともすると騒動の原因になりやすい例として引用されるこの事例は、ポンペイとヌケリアの市民というすでに明確な敵対関係にあった集団同士の社会的アイデンティティが交錯したために起きたものであり、剣闘士競技それ自体が原因ではなかったことが述べられる²⁾。最後に、観衆の社会階層についての分析と、闘技場の座席区分の変遷が時代を追って説明される。

第4章「Crowd dynamics at arena spectacles」では、競技の場にいた群集の様子が分析されていく。ここでも社会心理学の理論がベースとなるが、それはクラウド・ダイナミクスと呼ばれるものである。それによると、ある群集内に複数の下位集団が存在し、お互いにその姿が視覚的に認識できる状態になっていると、各下位集団の社会的アイデンティティと群集全体としての社会的アイデンティティがともに強められ、そのアイデンティティから生じる

一体感も増し、そのアイデンティティを表明することは、群集の成員に何らかの力を感じさせることにもなるという。群集（闘技場に集まった観客）が、内部に下位集団を持ちながら（元老院議員、騎士身分、一般市民、解放奴隷、奴隷…）、相互に認識できる状態（階層ごとの座席区分によって可能）というのは、まさに円形闘技場内部で発生することであり、その具体相が順に検討されていく。

第5章「Arenas of prejudice」は、社会的アイデンティティが強められる際の、とくに外集団に対する敵対的な意識を分析していく。すなわち、アリーナで行われる見世物にまつわる偏見の眼差しである。まず、偏見という現象全体が社会心理学の観点から説明され、それに基づいてローマ社会全体における偏見のありようと、闘技場における偏見のありようが考察される。見世物としての罪人の処刑においては、偏見という意識がアリーナへ人々を引きつけることに寄与はしていたが、それ自体が見世物全体に対する魅力とは言えないことが主張され、むしろ競技による興奮とそれへの期待、また娯楽としての暴力のもつ魅力こそが主要因ではなかったかとして、続く2つの章でその点が検討される。

第6章「Gladiators and sports spectatorship」では、アリーナで行われる見世物が現代の意味での「スポーツ」と完全に重なるものではないにせよ、「スポーツ」と呼びうるものであることが確認される。そのうえで、現代のスポーツをめぐる議論を参照しながら、剣闘士競技の魅力が分析されていく。しかしながら、ここからは公開処刑に人々がひきつけられた理由を説明できない。そこで、アリーナで行われた見世物に通底する魅力のありかを求めて、人々がなぜ「暴力」を「娯楽」と感じたのかを次章で検討する。

第7章「The attractions of violent spectacle」において Fagan は、暴力が人々をひきつけた理由を探っていく。ここで利用される分析概念はディスポジション理論(disposition theory)である。この理論は、もともと演劇などの分析から生み出されたものだが、それによると、芝居を観ている側は観覧中その登場人物について道徳的な価値判断を下していき、それが今度は自分がその芝居を楽しめるかどうかに影響を与えることになる、という。この理論がアリーナで行われる「暴力」の見世物にも適用可能であることを論じたのち、この理論の観点から古代ローマの観衆たちが見世物に熱狂した様子があらためて示される。

最後に「Conclusion: the lure of the arena」で、ここまでの議論が整理され、その限界も認めながら、あらためて Fagan の提示した枠組み、すなわち観衆の主體的な動機や衝動を重視し、アリーナの見世物の魅力がそこで観衆が味わえる感情的な経験にあったと示したことが強調される。そして、このような分析の結果、残虐で異質な古代ローマの見世物の背後にある魅力は、私たちが考える以上に現代の感情に近いものであることに注意を促して、本書は閉じられる。

本書の議論は、分析概念となる社会心理学の理論を説明し、それが古代ローマにも適用可能であることを論じたうえで、具体相を分析するという手順が繰り返されており、非常に明快に理解できる。問題は、現代人を対象に調査・実験して構築された社会心理学の理論が、

果たして古代ローマの人々に適用できるのかどうかという点に尽きる。しかしながら、この種の問題は決定的な証拠が得られず、その適否が水掛け論に終始してしまいがちである。したがって評者は、理論を適用した結果得られたものから、この種の議論の価値は見定められるべきであると考えている。Fagan の議論では、ポンペイの騒動を伝える史料の文言の解釈など、一つ一つの史料の分析について従來說にとどまる部分もあり、そこでも独自の視点を打ち出してもよかったのではないと思われるし、また、社会心理学的な分析に適合しやすいよう、剣闘士競技・円形闘技場のいくつかの側面、例えば宗教的な側面が捨象されたことは否めない。それでもなお、隣接科学の知見を援用して、「観客」の感情的な体験という、これまで議論の射程におさめることのできなかった視角からアリーナで行われる見世物の全体像を新に描き出した価値は大きい。さらに、例えば、闘技場が騒動のもとになりやすいのではないかとする素朴な思い込みを、あらためて社会心理学の成果を紹介して否定したことの意味も大きかろう。それゆえ、本書の意義は高く評価されるべきである。

ただし、Fagan の示した枠組みは、あくまで諸側面を捨象して得られた全体像である。評者もこれまでに剣闘士競技の研究を続けてきたが、Fagan の示すモデルに親和的な事例（ポンペイの事例）もあれば、彼のモデルからだけでは説明できない事例（皇帝礼拝と密接に結びついたバエティカの事例）もある³⁾。したがって、Fagan 自身もおそらく考えているように、今後の課題は剣闘士競技を論じたこれまでの研究と Fagan の示したモデルとの相互作用を生み出していくことにあるだろう。また、同じく公共の娯楽であっても、Fagan の理解では浴場と見世物にそれぞれ異なる役割があったことになる。これらが Fagan によってどのように説明されていくのかということにも注目していきたい。

最近、カルヌントゥムの円形闘技場跡近くで、剣闘士養成所と思われる遺構が発見されたという⁴⁾。数多くの研究が積み重ねられてきたこの領域だが、Fagan による分野横断的な分析の成果、そしてこれからなされていくであろう考古学的な新発見と、アリーナでの見世物をめぐる議論もまた、その魅力を失うことはないのである。

注

- 1) K. Hopkins, *Death and Renewal: Sociological Studies in Roman History II*, Cambridge, 1983, pp. 1-30. なお、先行研究の整理において G. Ville による一連の研究がほとんど言及されず、Hopkins が研究史上の画期とされているのは、隣接科学を援用する Fagan の姿勢に起因するものと思われる。
- 2) この事件については評者も分析を加えたことがあるが、おおむね著者の分析に同意する。以下の文献を参照されたい。拙稿「剣闘士競技とローマ社会—ポンペイの事例から」『人文知の新たな総合に向けて（21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第 5 回報告書 下巻）』京都大学大学院文学研究科, 2007, pp. 1-30.
- 3) 拙稿「剣闘士競技とローマ社会—ポンペイの事例から」と、同「帝政前期ヒスパニアにおける剣闘士競技—属州バエティカの事例を中心に—」『西洋古典学研究』58, 2010, pp. 37-48 を参照のこと。
- 4) 2011 年 9 月 14 日付のナショナルジオグラフィックニュースによる。
(URL: http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=20110914003&expand&source=gnews 最終閲覧日 2011 年 10 月 5 日)